

# 拡大する都市祭礼の様相について

ーバルセロナの「メルセ祭」を事例としてー

中 村 節 子

## 1. はじめに

カタルーニャ自治州の首府バルセロナは、人口は約 151 万人、首都のマドリードに次ぐ、スペイン第二の大都市である。「メルセ祭」は毎年 9 月下旬にバルセロナ市役所が主催で催される。9 月 24 日がバルセロナの守護聖人メルセの日であり、宗教的な儀礼が出発点であることから儀礼 (ritual) と祝祭 (festivity) が備わった都市祭礼である。現在の「メルセ祭」は巨人人形のパレードなどの伝統的な祭り<sup>1</sup>や、音楽コンサート、現代美術展、ストリートアート、娯楽イベントなどを複数の場所で同時開催し、都市をあげての大規模で複合的な大祭礼に発展している。本稿では、現在の「メルセ祭」の概略を記述したうえで、近年、祭りがどのように拡大の様相を示しているかを考察するのが目的である。筆者が調査の際、使用したのはスペイン語であるが、資料などのカタルーニャ語表記は尊重し、そのまま使用した。

## I 「メルセ祭」の概略

### ー 1. 2002 年の祭り

2002 年の「メルセ祭」は、9 月 20 日午後 7 時、サン・ジャウマ広場 (Plaça Sant Jaume)<sup>2</sup> における「開催宣言」で幕をあげた。約 1 時間の演説を行なったのはバレンティ・フステル (バルセロナ生まれ、59 歳) である<sup>3</sup>。

彼はバルセロナが生んだミロやアントニオ・ガウディの芸術家の名前を出しながら、バルセロナがいかに文化的に豊かであるかを語った。そして「文化芸術における想像力のみならず、産業面から見ても、その発展を促したのは勤勉で労働

意欲にたけたカタルーニャ人だったからこそなした成果である」とし、1992年のバルセロナオリンピックの成功例も引き合いに出しながら、「進歩のプロジェクトのようなバルセロナ」という言葉をたびたび強調した。さらにこの進歩しつづける都市バルセロナにおいて催される「メルセ祭」は、歴史を再認識し、コミュニティを強めるために存在すると述べた。

「メルセ祭」の拠点となるサン・ジャウマ広場は、9月20日から24日まで、祭りの中心地として活気をおびる。「メルセ祭」開催中の5日間だけで催されるプログラムは全体で300にも及び、会場となるのは市内21カ所である。

このように都市をあげて大規模に開催される「メルセ祭」は、その内容から次の5つに分類されている。

- ① 伝統的なショーやパレードの「伝統的な祭り」
- ② アントニオ・ガウディの偉業をたたえる祭り
- ③ 家族連れが楽しむためのショーやゲーム、スポーツなどのプログラム「すべての家族のための祭り」
- ④ ストリートアートを中心にしたフェスティバル「都市芸術祭」
- ⑤ 伝統的な音楽からダンス音楽まで幅広い音楽コンサート

「伝統的な祭り」は旧市街を中心に開催されるが、歴史ある祭祀集団が中心となり、「メルセ祭」の核ともなっている<sup>4</sup>。具体的な内容は、「メルセのパレード」(Cavalcada de la Mercè) や、「人間の城」(Castells)、カタルーニャ地方の古典楽器を演奏する「早朝の行進」(Matinades de grallers)<sup>5</sup>、ラッパ従兵の行進(Gelejada trabucaire)、さらに獣人形がダンスをする「獣たちの夜」(La nit de les bèsties) や、竜や獣の人形が火を吹きながら通りを練り歩く「火走り」(Correfoc) などである。そもそも巨人人形によるパレードは、守護聖人メルセを敬うための儀礼の一部であったが、現在では祝祭色が強く、多くの観光客を惹きつける祭りになっている<sup>6</sup>。カタルーニャ地方の古典楽器を演奏しながら、旧市街を練り歩く「早朝の行進」も同様である。

アントニオ・ガウディの偉業をたたえる祭りのなかでもっとも話題となったのは、聖家族教会(Sagrada Família) 前の広場でおこなわれた「人間の城の競演」



(Festa castella Gaudi 2002) である。サグラダ・ファミリアはガウディが設計し、現在も建設が続けられており、バルセロナ観光の名所となっている。カタルーニャ全土から選ばれた 40 のグループが参加した「人間の城」では、男たちは体をはって城を組み立てた。その団結力の結実としての高さと、美しさを競う祭りである<sup>7</sup>。

音楽コンサートやストリートアート、家族連れが楽しむためのショーやゲームなどは旧市街のみならず、新市街と周辺地区を含む場所でも展開された<sup>8</sup>。1992 年のバルセロナオリンピック以降、開発されたバルセロナ港周辺の広大な敷地では、「空の祭典」と名づけられたイベントがあり、大空に舞う「凧の競技」が行われた。

## ー 2. 起源から今日までのながれ

ではこの「メルセ祭」は、いつどのようなかたちではじまったのであろうか。メルセは 1687 年、厄災からバルセロナの人々を救ったのを機に、バルセロナの守護聖人になったことがバルセロナ市民に広く知られている。その厄災とは、バルセロナ中に飛蝗（昆虫）が異常発生して作物を食い荒らした事態である。そのため、人々は食糧難と生活苦に追い込まれただけでなく、伝染病の蔓延にも苦しめられた。当時におけるバルセロナ最大の危機であった。そこで人々が聖母メルセに、飛蝗の駆除を懇願したところ、すぐに天使がやってきて、飛蝗をすべて連れ去ったという。メルセはまさに救世主であった。

このようにメルセがバルセロナで人々を救った様子は、1752 年のバロック風演劇で上演されている。そして 1775 年にはメルセ広場もでき、火をともした棒をかかげた宗教行列も行なわれたことが記録されている。

1871 年には市民選挙で選ばれたフランセスク・ソレール市長が、「メルセ祭」をにぎやかで活気に満ちた「商業的で芸術的な大祭」(GRAN FERIA MERCANTIL ARTÍSTICA) にしたいという自らの考えをうちだした。彼は「メルセ祭」の責任者を選定することで、バルセロナらしい祭りを実現したとされている。

その後、市役所が主体になり、市民のための祭りへと動き出したのが、1885

年から 1889 年にかけてのことである。特に 1902 年までが活発に「メルセ祭」は催された。この時期に、今日のメルセ祭につながる骨格、つまり「市民のための祭り」という全体のイメージが形作られた。市民の声を汲み取りながら、にぎやかで活動的な祭りにする努力がなされたのである。1902 年はまた最も芸術性の高いパレードが行われたが<sup>9</sup>、それまで宗教的なパレードに反対だった人々も巻き込んだ、画期的な祭りであったとされている。

しかし、その後の戦争やフランコ独裁という政治的な激動のなか、「メルセ祭」は衰退する。1936 年から 1939 年間まで続いた市民戦争を経て、フランコ政権となった時代はカタルーニャの文化がことごとく抑圧されていた。カタルーニャ人は祭りを催すことも、さらにカタルーニャ語を使用することもさえも許されなかったのである。

フランコ没後に人々の要求にこたえるかたちで、祭りが復活したのが 1977 年である。新しい時代がはじまるという祝福の意味をこめて人々は祭りをとらえた。人々が望んでいたように、カタルーニャの自治を表明する政治を支援するかたちで「メルセ祭」は復活したのであった<sup>10</sup>。

「メルセ祭」を市民のための祭りにするという方針が固められ、その結果として歴史に残るパレードが催された 1902 年から、100 年目にあたる 2002 年の「メルセ祭」では、100 周年を祝うパレード（Cercavila del centenari）が盛大に行なわれた。

## II. 「メルセ祭」における近年の動き

### ー 1. 企業支援

筆者がはじめて「メルセ祭」を直接観察したのは 1991 年である。1991 年には 8 ヶ所で 65 のプログラムが行われていたが、2002 年には会場数が 21 ヶ所、プログラム数は 300 となり、あきらかな規模の拡大が見られた（表 1 参照）。

「メルセ祭」は前章で示した通り、'70 年代から復活し、伝統的な祭りに音楽や演劇などの現代表現が加わった都市型の祭礼となった。現在ではスポーツや子供向けのプログラム、そして市民参加による企画が加わり、観客層をより広げた複合的で大規模な祭礼になっている。



'91年の総合プログラムには、ページの片隅に CAIMA DE CATALUNIA（大手都市銀行）、EL PAIS（有力新聞）、San Miguel（ビール会社）など、全14社のロゴが見られた。この14社の中には、日立の家電製品、アップル・コンピューター、コカコーラの広告も含まれている。このように外資系企業がスポンサーになっていることから、すでに開かれた祭礼になっていることがわかる。開かれた祭りとは、「メルセ祭」がもつ開放性を示している。経済的基盤においても、限られた（閉ざされた）に人びとと社会で催される祭りではなく、経済的支援の間口を広げ、協力者を求めること自体に、開かれた祭りとしての特徴が見える。

2002年時点では、1991年と比べ、企業スポンサーの数もふくれあがっている。EL PAIS（有力新聞）、SER（ラジオ会社）、PANS（ファーストフードショップのチェーン店）<sup>11</sup>、Buitoni（スパゲティメーカー）、Coca Cola（炭酸飲料）、Caja Madrid（銀行）などの企業が名を連ねている。さらに後援スポンサーとしても大手新聞、テレビ局、ラジオ局、ワイン製造会社、ハードロックカフェなどがあり、すべてを合わせると、52社におよぶ（表2参照）。

筆者は2003年7月24日、バルセロナ市役所・文化研究所のマイテ・マネに「メルセ祭」と支援企業との関係について聞き取り調査を行った。マイテは60歳ぐらいの女性で、フランコ独裁によってカタルーニャの伝統や文化が押さえ込まれた時代のバルセロナを知る人物である。

「メルセ祭は年々拡大し、多くの市民が参加するようになった。それだけに多くのお金が必要。これだけ大きな規模の祭りとなると、市も企業からの協力なしではやっていけない」と語る。現在では「メルセ祭」の総予算の50%を企業からの協賛金でまかなわれており、それぞれの祭りや催しごとに、多種多様なスポンサーがついている。つまり、各社各様の支援の仕方をしており、祭り行うための資金を援助している企業もあれば、カタルーニャで企業を起こした「PANS」のように、「メルセ祭」の期間中、約4000人のスタッフを動員し、祭りに参加している祭祀集団へ食事を提供している企業もある。また、企業が社員を派遣するところや、社内でボランティアを募集して、祭りに人材を送り込むところもあり、企業の支援形態はさまざまなかたちで行われている。

表1 1991年と2002年における「メルセ祭」の規模

	1991 年	2002 年
会場数と主な会場	8ヶ所、旧市街が中心	21ヶ所、旧市街を中心に新市街、周辺地区へと拡大
総合プログラム数	65	300
プログラム内容	伝統的な祭り、音楽、美術、演劇など	伝統的な祭り、音楽、美術、演劇、ストリートアート、スポーツイベント、子ども向けのプログラム、市民参加のイベントなど
スポンサーの数	14企業	52企業

表2 2002年度のスポンサーの内訳と数

スポンサーの業種	カタルーニャの企業	スペイン国内の企業	外資系企業	総数
マスコミ関係 (新聞・ラジオ・テレビ)	11	6		17
芸術団体等	6		1	7
食品関係 (スパゲティ、冷凍食品、ビール、コーラ、ワイン)	2		2	4
劇場、水族館などの施設	5			5
ファーストフード、レストラン	2		1	3
銀行		2		2
通信(電話会社)	1	1		2
不動産会社		1		1
ショッピングセンター	1			1
その他	2			2
<合計>	30	10	4	不明 8 52

表1および表2は「メルセ祭 2002」の総合カタログと聞き取り調査をもとに筆者が作成した。

## ー 2. 「メルセ祭」にこめられた想い

ここで、2002年「メルセ祭」のポスターを製作したアントニオ・タピエスのメッセージを見てみたい。

「伝統的で最新のステージ、芸術、音楽を開催するメルセ祭は、地中海の民族である過去を回復して、世界の将来への挑戦を映し出すことを望む。9月20日から24日までの5日間、ありとあらゆる経験をするため、1000の催しのなかから、好きなものを人々が選び通りに出かけていく祭りである」(「Mercè 2002」より)



タピエスが「地中海の民族である過去」と称するのは、次のような時代である。

カタルーニャは古代ローマ時代に地中海貿易の拠点として、イベリア半島で最も栄えた地域である。その後、西ゴート王国の版図に入ったが、西ゴート時代の後期にアフリカから北進してきたイスラム教徒の侵入に対して、フランク王国の防壁の役割を担った。このことからカタルーニャは、イベリア半島内の他のイスラム勢力圏地域とは異なった歴史を歩み、地中海貿易に加え、諸国との貿易などで大躍進をとげ、中世までにヨーロッパの列強のひとつに数え上げられるまでになった。いわゆる19世紀のカタルーニャロマン主義者が懐旧し、心の拠り所とする「地中海交易の覇者としてのカタルーニャ」である。そうした歴史がタピエスのなかに輝きをもった過去として存在しているのである。またそこにはEU（ヨーロッパ連合）発足後、スペインのなかのカタルーニャではなく、カタルーニャが地中海の一国としてヨーロッパ諸国と関わることを望むタピエスの意思がこめられている。

さらに「世界の将来への挑戦…」と語る背景には、カタルーニャが挑戦者として存在してきた歴史がある。スペインはもともとイスラム教徒に対するレコンキスタを通して成立した国家である。その中心を担ったのはカスティーリャであったため、主流にはなりえなかったカタルーニャはあくまでもスペインの辺境であった。1714年に自治権を奪われて以来、常に国王や中央政府と対立してきたカタルーニャであるが、バルセロナは逆にそこをバネに独自の文化を創り上げてきたことは先述したとおりである。特にフランコ政権の時期（1939～1975）には、カタルーニャ語の使用も禁止されていた。それだけにカタルーニャ人のカタルーニャ語に対する思い入れが、一市民でもあるタピエスからもうかがえる<sup>13</sup>。その証拠に、タピエスの絵には「cantar（歌う）」「coneixer（知る）」「estimar（すべてを愛する）」「servir（手伝う）」の四つのカタルーニャ語の単語が踊るように描かれている。

では人びとが「ありとあらゆる経験をするため、1000の催しのなかから、好きなものを人々が選り通りに出かけていく祭り」にするために、どのような企画がうちだされたのだろうか。タピエスとともに「メルセ祭」へのメッセージを掲載した市長ホアン・クロスは「総合的で幻想的な祭りであるメルセ祭は“ミル・マ

スカラス（千の顔）」を持ち、人びとは対話し、自分を発見できる」と述べている。

“ミル・マスカラス（千の顔）」である理由は「メルセ祭」で催されるプログラムが多種多彩であり、すべての文化を網羅していることを示すとともに、具体的な数字とも重ね合わせている。つまり、総合カタログに掲載されたプログラム数は300であり、このほか、掲載されていない市民参加型のイベントや小規模のパフォーマンスなど数である700を加えると総数が1000になるからである<sup>14</sup>。このような多彩なプログラムがあるからこそ、人びとはそこから自分の好みに合ったものが選択でき、対話が生まれ、新たな出会いができるとしているのである。

別の角度から見れば、バルセロナが多くの移民が暮らす都市社会であることも、多くのプログラムを必要とする要因として考えられる。バルセロナ市は総人口約150万人のうち、10万人は外国人である<sup>15</sup>。大都市であるだけに価値観や美意識もさまざまで、労働者のなかには地方からの出身者も多い。市の広報物のほとんどがカタルーニャ語で書かれていることへの反発もある。だからこそ、そうした人びとも含めて、多様な価値観を受け入れる器となるように、「メルセ祭」は娯楽的要素を年々増大させ、言葉の壁を乗り越え、誰もが楽しめる祭礼へと変化していったともいえる。

### ー 3. 創造されるプログラム

現在の「メルセ祭」では催しものが多岐におよんでいるが、本稿では「メルセ祭」の核となっている「伝統的な祭り」において、特に新しく企画された部分に注目したい。’81年に、これまで歴史的なシンボルとして展示されることが多かった巨人を、自由に演劇的に動き回らせた「巨人人形の踊り（Ball de Gegants）」がはじまっている。’93年からはさらにエンターテインメント性を高めるために、初日の「開催宣言」の後、巨人人形と竜などの人形がステージでダンスをする「開催の口火（Toc d’lnici）」が生み出された。エンディングにはバルセロナ市役所の屋上から、突き抜けるような爆音とともに、花火が立て続けに打ち上げられるが、広場の背景となる建物を巻き込んだダイナミックな演出で、広場を劇場化したステージに仕立てている。



そして'98年には「地中海のパレード (Cavalcada Mediterrània)」をスタートさせ、地中海沿岸の国々、モロッコやフランス、イタリアからも人形を集めたパレードをはじめている。そして2002年にはガウディ生誕150周年にちなんで、ガウディをイメージした人形が制作され、「百周年のはじまりを祝う行進」(Cercavila del centenary)が行なわた。また最終日に行われる「メルセのパレード」は、バルセロナの都市としてのイメージを伝える大パレードであるが<sup>16</sup>、図1にあるように、1991年の時点と2002年では内容が異なり、登場する巨人人形の数は大幅に増えている。

図1 1991年と2002年におけるメルセの祝日のパレード



一方で、1992年にははじめての「風の競技」がプログラムに加わった。この年はバルセロナでオリンピックが開催されたが、その際整備されたバルセロナ湾岸の敷地を最大に利用したイベントである。家族連れを対象にした年齢層を選ばないものだけに、スポンサーを集めるには格好の対象となった。

その後も、家族連れを意識して、公共交通機関を利用したゲームも行い、子どもたちの関心を呼ぶなど、娯楽性の高い催しを打ち出したことが、協賛企業を増やし、祭り拡大の大きな要素となっている。

#### 一4. 数字から見る観客の増加

次にここ5年間の「メルセ祭」における観客数の変化をみたい。筆者は2003年12月10日に、バルセロナ市役所・文化研究所のオリオール・パスカールから、近年の観客動員数の資料を入手した。表3に示すように、1998年に56万人であった総観客数が、1999年には65万人になり、2002年には139万人、最新の2003年では147万人にのぼっている。

オリオールは、このデータが科学的に厳密な規則に従ったものではないとし、その理由については、活動の主題をつかむことなしに、異なった空間の一般参加を数えているためであり、同じようなテーマや団体が集まる催しものとは比較ができないからであるとしている。さらに毎年行なわれる同じテーマのものでも、その内容や構成に変化があり、同じ条件での比較はできないからため、あくまでもその祭りに集まった、一般観客の数を単純に数えたと考えられる。しかし、そうした諸条件を考え合わせても、これらのデータからは「メルセ祭」が前年度にも増して観客の多い祭礼になっていることは、確実に読み取ることができる。なかでも、表4からわかるように、観客動員数を大幅に引き上げているのは、「ピロムシカル」と「空の祭典」である。「ピロムシカル」とは「メルセ祭」最終日の夜、モンジックの丘で催される花火と音楽によるスペクタクルなショーである。「空の祭典」は航空工学にもともとづき、また芸術作品としての完成度も高い風が大空を舞うショーである。このように娯楽性と野外での開放感にあふれた催しで幅広い観客層を取り込んでいる。

筆者はバルセロナ市役所・文化研究所において聞き取り調査を重ねているが、2003年8月13日、「メルセ祭」の伝統芸能部門の責任者であるハビエル・コルドミが次のように語っている。

「メルセ祭はバルセロナ市内と周辺地域の伝統行事や地区の祭りを集めただけではなく、文化関係のすべての分野を網羅しながら、バルセロナのプロモーション的な意味合いのある祭りである」

旧市街で生まれたコルドミは、伝統的な祭りの息吹をあたらしいカタチで表現するために、「メルセ祭」で、祭祀集団を結集させた巨人人形のパレードなどを企画してきた。それらの企画をはじめ、多彩な祭りがバルセロナをアピールするこ



とにつながっているとしているのである。この発言からも、「メルセ祭」を活性化させることで多くの人を呼び、バルセロナという都市そのものを内外に知らしめようとする主催者側の意図が浮かび上がってくるのである。

表3 「メルセ祭」における総動員数の変化

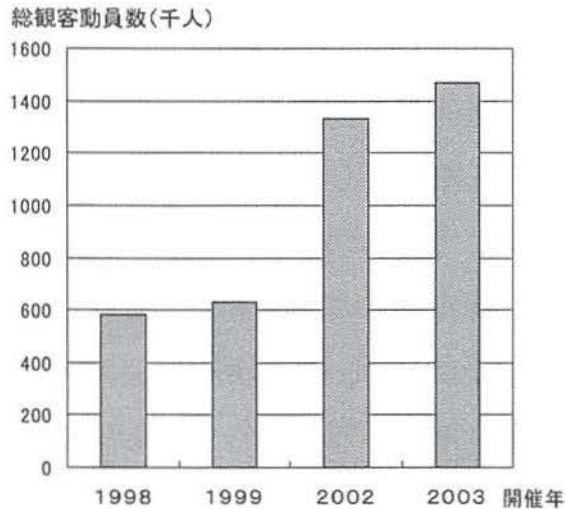
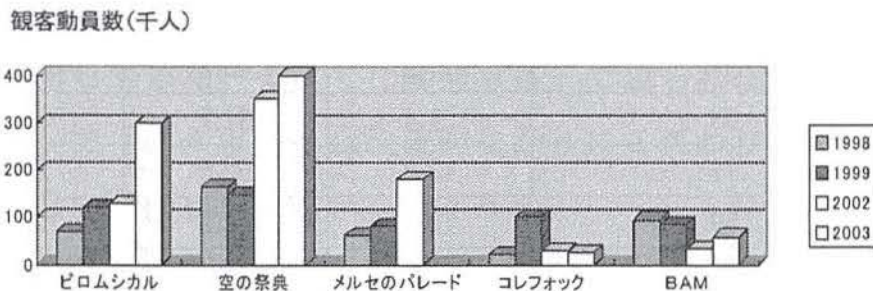


表4 メルセ祭の構成別に見る動員数の変化



出典／Servicio de Informacion, Ayuntamiento de Barcelona. Instituto de Cultura(表3および表4)

注・2000年および2001年度は統計がないため除いてある。また「メルセのパレード」については、2003年度の統計が測定されていない。BAMは「Barcelona Accion Musical」の略である。

## ー5. 諸外国から参加するアーティスト

先述のオリオールは、2003年度の「メルセ祭」では、街中に割り当てられた20の会場で、800人以上のアーティストが、1000時間以上の活発な祭りを提供したとしている。アーティストは、前年度より11カ国多い、33ヶ国の異なった国々からの人々であり、遠くはニュージーランドやオーストラリア、アイスランドなどからも訪れた。またそれらに加え、1960人の専門家も参加している。その内訳は、仲介業者の代表者が443人、祭祀集団・組織の人々が295人、アーティスト集団が

473人、世界のショーと街頭演劇の関係者749人である。

さらに表5に示すように「メルセ祭」の柱の一つである音楽コンサートで使用する言語は、毎年、外国語の割合が3割前後を占めている。先述したように「メルセ祭」のなかの伝統的な祭りは、継続的に新しい企画を組み込むことで構成されているが、音楽は諸外国から表現者を招き入れ、国際色を出すことが配慮されている。

音楽催事に限らず、美術や演劇でも、開催年で企画の規模に大小があるが、筆者が直接観察した限りでは、バルセロナを拠点とした地中海都市との交流、ヨーロッパ諸国からの招きが数多く見られる。演劇に関していえば、'91年はランブラス通り周辺に特設テントの劇場が作られ、野外の演劇も充実していた年であった。オリオール・パスカールの説明にあるように、このように開催年によって催事内容の内容や組織が年ごとに異なっているものの、あくまでも国際都市としてのバルセロナを意識したものといえる。

表5 メルセ祭における音楽祭事（ボーカルのコンサート）の使用言語の割合（%）

	ボーカルのコンサート数	カタラン語	スペイン語	外国語
Mercè 2003	134	17.9	45.2	36.9
Mercè 2002	68	1.4	61.7	36.9
Mercè 2001	72	13.8	62.5	23.7
Mercè 2000	59	16.9	54.2	28.9
Mercè 1999	39	7.6	61	31.4
Mercè 1998	78	23	47	30

出典／[www.contrastant.net](http://www.contrastant.net)

## まとめ

「メルセ祭」は19世紀の中ごろに、商業的で芸術的な大祭として構想され、20世紀に入ってから、「市民のための祭り」にするという基本方針が決められていた祭礼である。

1991年と2002年を比較すると、会場は3倍、プログラムも4～5倍に増えて内容も多様化し、支援企業も急激な増加をみせている。有末賢は都市にお



ける祝祭の共同性はメディアによって複製され、また少しでも多くの人を集めようとしている意味で、本質的に「商業主義（commercialism）的である」としているように（2000：265-267）、祝祭にはメディアと商業主義の二重の構造が基本的に存在する。逆に都市の祝祭を発展させようとする場合には、これらを強化することが必須となってくる。そういった意味で、開かれた祭りにはメディアによる増幅効果とともに、企業支援などによる経済的基盤の充足がもとめられるのである。

このように「メルセ祭」が経済的基盤を外資系企業にも求める開かれた祭りであり、諸外国からアーティストや表現者を集めるなど、国際色を意識した祭りであることは第2章であきらかにしたとおりである。

「メルセ祭」は、花火と音楽による「ピロムシカル」と呼ばれるショーやバルセロナオリンピックの跡地を最大に利用した「風の競演」に代表されるように、娯楽的要素を増大させ、観客層を増やしている。その一方で、地域の祭りにねづいた巨人人形をそのまま紹介するのではなく、「開催の口火」や「メルセのパレード」にみられるように、巨人人形が踊る新しいパレードを生み出してきた。そして「開催宣言」で語られた通り、進歩するバルセロナにおいて「メルセ祭」は伝統的な祭りにこだわり、それらを「メルセ祭」の核として発展し続けているのである。

米山俊直は、都市祭礼は都市住民の心意表現のひとつのであり、伝統的に継続された神事としての祭礼のノウハウを活用することが、世俗化したと都市の活力維持に役立つことを指摘しているが（2000：24-39）、同様の意味で「メルセ祭」における伝統的な祭りは活用されているのである。

発展するとは何か…祭礼の規模や観客動員数といった表面上の問題から把握する場合と、祭りの担い手や参加者側の内部構造からとらえる場合では当然、視点が異なる。本論においては「メルセ祭」の表層の現象のみを記述し、2002年を軸として、「メルセ祭」の近年の様相を、規模の拡大と内容の変化および主催者や関係者の意向から考察してきた。

「メルセ祭はプロモーション的な祭り」と語ったバルセロナ市役所・文化研究所のハビエルの発言からもうかがえるように、「メルセ祭」はバルセロ

ナという都市を促進するや役目を果たしている。そこには「メルセ祭」を進歩させることが都市の発展につながるという行政の意向が根底に流れている。そして、このような「メルセ祭」の足元を支えているのは、そうした行政の意向に賛同した祭祀集団や市民であることも同時に見えてくる。

「メルセ祭」は、フランコ独裁政権の後、1977年に新しい時代がはじまるという祝福の意味がこめられて復活した。フランコの抑圧から解放された人々のカタルーニャの自立と平和への願いが脈うつ祭礼である。つまり、強いカタルーニャ人としての民族意識に支えられた人びと姿と行動力が「メルセ祭」の基盤にある。そういった意味からも、祭祀集団や一般市民の意識や活動が、近年どのように変化しているのか、変動するヨーロッパの社会動向を踏まえながら、別稿にて論述していきたい。

- 
- 1 1980年代以降、日本民族学において、「伝統」の概念に対する議論や批判および再考が行なわれているように、純粹培養のような「伝統」はもはやありえない。本稿では、かつてある特定の地域で、古くから引き継がれてきた祭りや行事が今に受け継がれているものとして、「メルセ祭」の主催者が表現している「伝統的な祭り」をそのまま使用した。
  - 2 バルセロナ市役所庁舎とカタルーニャ自治政府庁舎に囲まれた幅約60メートルの石畳の空間である。1932年、カタルーニャ自治法が制定され、スペイン共和国内の大統領制のカタルーニャ政府が成立した際、カタルーニャ政府の誕生を祝う市民たちによって埋め尽くされた（川成1994：398）広場として知られ、カタルーニャの自治の歴史を髣髴させる場所である。
  - 3 開催宣言はバルセロナ在住の著名な文化人が行うのがならわしとされている。2002年度はバルセロナ在住の心臓外科医である氏が選ばれた。
  - 4 中村節子2005a「バルセロナの都市祭礼『メルセ祭』と祭祀集団の役割についての分析」『生活学論叢 vol.10』のp 70からp 74において詳しく記述した。
  - 5 自宅のピソ（集合住宅）の前で演奏する楽団に、住民はカタルーニャの州旗を翻して歓迎の意を表明する。時には住民から、楽団の人々へワインがふるまわれることもある。
  - 6 和崎春日は京都の左大文祭りの研究において、地元の伝統的行事が市民や旅行者に解放される点を指摘し、「祈る者」に行事が開かれれば、「見る者」にも開かれ、宗教行事



が自動的に観光行事性をも随行するとしているが（和崎1987：P233－241）、信仰性と観光性が渾然一体となっている点は「メルセ祭」も同様である。また森田三郎は儀礼を日常空間から聖なる非日常の世界へと参加者をみちびく祭り特有の手段として重視しながらも、祝祭が単なる日常的規制の廃止ではなく、しばしば退屈で祭儀における過剰な規則からの、聖なる自由であり解放であるとしているが（森田1990：156）、巨人人形のパレードもこうした点から祝祭色が強まったと思われる。

- 7 「人間の城」はカタルーニャ地方の伝統的な祭りには必ずといっていいほど登場する。もともと春先の植物の成長力を模し、豊作を願ったもので、1794年に始まったとされている。人間が人間の上に乗って塔のようになり踊るのは古くから地中海沿岸の民族に広く見られるが、カタルーニャでは踊りが取り除かれ、笛と太鼓の伴奏が入るのが特徴である。
- 8 バルセロナを空間的にみると、歴史的時間の経過とともに旧市街、新市街、周辺地区が形成された、三重構造ともいえる都市のつくりになっている（岸田1991）。中世の時代、バルセロナは地中海貿易で栄え、ギリシャ、イタリア、北アフリカの諸都市と交流して一大繁栄期を築いたが、その全盛期に旧市街は形成された。
- 9 19世紀半ばまでにカタルーニャの伝統産業である繊維工業、綿工業が大躍進したが、これらで財を得た資本家がスポンサーとなって大パレードが実現した。19世紀から20世紀初頭にかけて、カタルーニャ地方ではモデルニスモ（modernisme）と呼ばれる華麗な建築様式が流行し、ガウディもモデルニスモ芸術の担い手として出発している。
- 10 「メルセ祭」の歴史についてはJordi Pablo（2000）を参照した。Jordiは今日までの「メルセ祭」を①19世紀後半から1904年まで ②1904年から市民戦争（Guerra Civil）まで ③1940年代から1970年代 ④1970年代から現在にいたるまでの4つの時代に区分し分析している。
- 11 バルセロナの最も賑やかな通りであるランブラス通りをはじめ、市内各所にチェーン展開している。
- 12 「メルセ祭」では毎年、ひとりの芸術家が選ばれ、祭りをイメージした作品を自在に発表し、それが広報物のすべてに使われる。タピエスはスペインを代表する現代画家で、市内には「アントニオ・タピエス美術館」がある。
- 13 カタルーニャ州では1983年に「カタルーニャ言語正常化法」が作られ、歴史的諸条件により抑圧されてきたカタルーニャ語を生活のあらゆる面で使おうと促進してきた経緯がある。その後の言語政策と、バルセロナにおけるスペイン語とカタルーニャ語の使用状況については、中村2005b「バルセロナにおける二重言語と市民生活」『ヨーロッパ基層文化研究vol.1』において詳しく論じた。
- 14 2002年10月18日、バルセロナ市役所公式ホームページでは、「メルセ祭」で700の活動とプログラムされたショーが行われ、200万人の人々が通りに出、祭りを楽しみ楽しい時

間を過ごしたと報告されている。主な会場となったグラシア通りでは40万人の人出があり、188の市民コミュニティが参加し、295の活動（コンサート、店、展示、ゲームなど）が行われた。<http://www.bcn.es>

15 「バルセロナの人口構成・国籍（2001年）」、バルセロナ市役所（Ajuntament de Barcelona）<http://www.bcn.es>

16 中村節子、前掲書（脚注4）p 72からp 73において詳しく記述した。バルセロナにおける巨人人形は93種類とされているが（Jordi：2000）、「メルセのパレード」にはバルセロナ以外からも人形が集められている。

### <引用文献>

- 有末賢 2000「現代の都市空間におけるメディアと祝祭」『祝祭の100年』日本生活学会編 ドメス出版
- 川成洋 1994「果敢なる失敗と惨憺たる成功～スペイン・カタルーニャの再生をめぐって」『幻想のディスクール～民衆文化と芸術の接点』倉智 恒夫・水之江 有一・前田 彰一編 多賀出版
- 岸田省吾 1991『地中海都市の存在証明』丸善
- 田澤 耕 1992『カタルーニャ50のQ&A』新潮社
- 中村節子 2005 a「バルセロナの都市祭礼『メルセ祭』と祭祀集団の役割についての分析」『生活学論叢 vol.10』
- 2005 b 「バルセロナにおける二重言語と市民生活」『ヨーロッパ基層文化研究 vol.1』
- 森田三郎 1990『祭りの文化人類学』世界思想社
- 米山俊直 2000「都市祭礼と地域社会の活性化」『祝祭の100年』日本生活学会編 ドメス出版
- 和崎春日 1987『左大文字の都市人類学』弘文堂
- Jordi Pablo 2000 “LA MERCÈ IL · LUSTRADA”, Ajuntament de Barcelona · Institut de cultura
- “La Mercè 2002” Ajuntament de Barcelona · Institut de cultura

（なかむら せつこ 比較人文学）